荻乃之集

十九

詞を名せる事

[v. 33]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 33
Copy 1
Asian
Japan
Cage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

（法氏卅九戈の三月より十月までの多き名 吟花嶋長文ヘタム）
ゐいそぎれ程にも宰相の中将はながめがちにて
ほれくしき心ちするを、何はあやしくまぢ
心ながし、しうねきぞかしおれがちにかうしつゝと
なしが、関もりのうちもねぬべきやしき紙、しひ
よもり給なるをさくながし、花なじくはひとまろ
しぬさ面にこまてむとねんずるもくるしく
むこぶれ給、妙ぎこしもおとゞのかすめ給しことの
すぢをもしさもあしがなるのながりにかんと
なげかしうて、おやしくそむきくにさすがなる
れもろ恋なり、おとゞもさしそこうろづよがり給し
ゝどうけかしぬにおぼしつゞひて、れこやにも

さやうにせうちもて始なば。又とくあらためせひ
くづらんほど。人のためもくるしき。ワがれかる
ざ面なりも人ワらはれなりなどのげからうろぐ
しさことやまじらん。志のぶとすれどうちくの
こと。あやまりも世まもりまるべし。とくまざら
りして。れまけぬべきなありと。定しなりぬ。うへ(比)
つれなくてうしことけぬ。れ中(添とは)なれば。ゆくりなく
いひよらんもいかゞと定しまぐりまて。ことく
しくもてなさんも。ひとれせもんとろをとなり。
いかなるついでしてかれのめかすべきなどなば
すま。三月廿日(大大臣)初日いまの初日こやのれ忌日(きまち)まて。

極(ごくらく)ゐるまうで(ねり)ゐへり。あぐちこれひさつれ。いさ
ほひあらまほしく。上達(ア)などもあまるゝ。ふつどひ
ゐへるゝ。宰(タ)ねの中将。おさくけちひをとらず。ふそほ
しくて。かたちなど。ふぐいゆいうじ。ささうりゝ
ねびけて。とりあつめ先で。ふさ人の所有様なり。
このおとゞ(ね)をば。つらしとも異し給しよ事。見て
なりも心づかひをられて。いといたうよういし
もてしづめてもれし給を。おとゞ(ね)もつねよりはめ
とゞめ給。こず程などは六条院(源)よりもきさせゐへ事。
宰(タ)ねの君は。ましてよろづをとりもちて。おもれゝ
いとゝなつうまつり給。夕かけてこれ人へ事給

ほど。萩にこれちりみだれ。露しげくおきさまよふおとた
せうしきし出て。お使めしうかぞ。かさゝおすゞめ
給。寧ねもおもふれなる夕のそしきまいりくじうち
まありて。おまけなる人ごのさりくまち。おそをおすゞめ
いりておのへり。ごころところさめきそりにほしくや
きけん。袖をひきとまそ。おどいとこよなくそ
そうじもるまくる。ぞふのこのりの色よりくこ
おぼさば。つゝとゆうしおそらや。のそりすくなくおり
ゆくする色の世よ。さひすそのへるもうしこ。こゝも
べくおどのこまんべ。うちうしこまりて。色うし
れどもむけも。ぞにこそてきすべくき使ようけ

給りをくこと侍しかど、ゆるしなきれかしさる
はばかりつゝなどこそこゝ給ころあはれくしさ
あまかぎるこれちりぐまさをひかへりおぬ。恋
いるさて、例ならずかしさげこ給つゝんなどよ
とゝもる心をかけたるれあたりなれば、たゝなさ
ことなれどこゝとゞまりて、とやうやとおもひ
あし給こゝらの手代のたひのまゝしかや、かれ
おとゞもなぶりなくそしかもりつゝたゝなさつい
でのワざとはなくさすがよつさぐしかんを
おぼすよ。宮月のつゝちごろおまへの夜の茶いと
かゝしろうささこぶれて、これつゝの夜ならずこゝ

たゞすゞきんこくおしきさうたまうりお
そびゐでしめて蕃山殿のいとゞ文まゐらする
殿(柏ノ)中ねして(ゆふべ)れきうそこあり一日の茶(柏木ゐらす)のげ志
対面あそばし侍しをれいと庭あそばされ
語さんやとしありけれめでたけ
(に)るゞ宿の窓のなごりぞそれなるうづわやへ
うぬ甚のあまりをげ(地)よりとおもふるさ枝よつけ
めへり(ゆふ)ちつけのへるもこゝろときめきをしれて
りしこもりこさて語
(夕)あまくよありやまどりんゆぢの名ごそなれ
どきのゐどくしくうと申して(河)くちおしくこそ

二四

おくりあそしの人よくとくて給れ（指詞）
ともよくそとの人ば。（リ詞）ワづうしきずいぶんも（柏と云く）
いなそくへし給。（源詞）よくどのおまへまで。（休詞）うくおん
とそゆんざきせ給。（源詞）ぜかやうあそて拙しの人多
まやおくん。さも少すこしもおしし給ちどこそいすざ
（大まくらす）ましくくのけうちありしこともとけめぐの給。（格ノ孝）
（比）此心をごりこよあうわくげあり。（休詞）ざしも給しじ
多いの人のかぢづれうりも面白く咲て給ある也。
さげあるゝろほひあればおそびきんあどうや給らん
どり給。（源詞）ワざとつくひされうりけるをあやうもの
さい人とゆまし給いばんあしんとさくしまいらるしく。

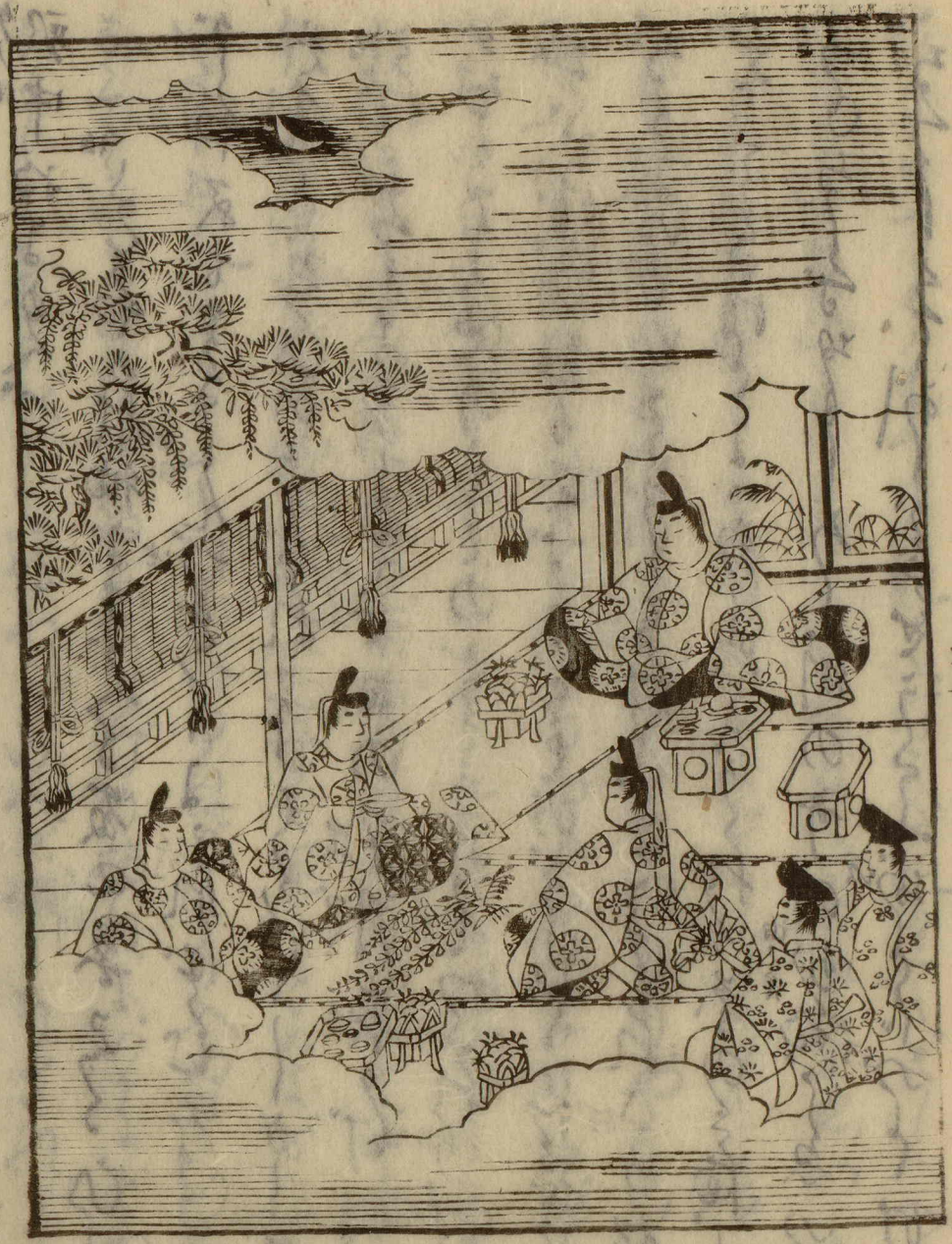
こゝあらず。なを(係詞)しこそあまりこくてゝろびゝあれ。
非(ひ)参(さん)議(ぎ)のほど。なまとなさけ人そ。ふるあひは
よけれ。ひさつくろりんやとて。ワ(比)がれねうの心こと
なるよ。えなしぬれぞどもぐして。れともまもる
きてなれ給。ワ(タ)がれ方まてこゝろづかひいこじく
けさうじて。こそかれもすぎ心やましきほどな
ようでゆへり。おるじ(は)の恵ごち中(柏)ねをもじめて。
七八人うちつれてむかへいれなるいづれともなく
おしさうちどもなれど。なを(タ)ひとますぐれて
あぎやかまさりしなる抱しなるしうよしづき
ぐしげなり。おとゝ(は)あましひさつくろりをなど

し給ひ、よういをろかなるぞ。ひかうゐるもなどし
なて、出給とて、小(詞)の目のつき女房などに、のぞ
きてこゑへ、いとかうさくにねびまさる人(タ)なり。
よういなどいとしげかに、抱しきやおぎやかにぬけ
いでおよすけたるかはちくおとゞにもまさる
ざ面にてあめれ。かれは多ぐいとをちにな面
めしうあいぎつきて、こうにゑましく、世中に
すると心ちぞし給。おほやけぎ面も、すこしこれも
れて、おぎれたるなりし。ことりぞうし。これ(タ)は
ざえのきはもまさり、こころもちねおくしく、すく
よかにしひたりと、世に覚したるなどのなて、

ひきつくろひてぞふゐんし給。もれまゐやうな
むべくしき。れ抱鏡にすうしぢうりまて。ちれ志
けうまうつり給ぬ。妻の姿いづれとなくこれひしけ
出る女ごとに。めおぢろうぬいなきを。うろこじうく
うちすてくちりぬるが。うしあしうおぼゆるころ
ほひ。この姿のひとりうちをくれて。夜にさきうろ
ほどなん。おやしくうろまてあそれにおぼし
もべる。いろもまさ。なつしきゆりまも志け
べしとて。うちほゝ思ふこまへるかしきまて。白ひ
きよげなり。月ハさしいでぬれど。姿の女さぶうにも
こゝぬほどなりをもてあそぶり。うろをよをて

おほえき事りれあそびし給おとゞほどなく
そしゑひをしまて、ぶらりがちしくしゐゑりし
給をさらころしていろうすまひなやめり、云を
すゑの世にはあまりまでおめのしるのゆうそくに
抱し給めりをよそひかりぬる人おもひすて給
なんつらかりける、攷籍にも家礼といふことあり
べくや、なまがしのをしへもよく見ししるらんと
しひまつりをいろう心なやまし給とうしきこゝ也
べくなんなどのまて、ゑひなきにやおりしき程に
氣色ばゝ給、いつでかむかしをしまへ出られりまゐ
どもには男をしてつるさ夜にもとそしたまへしり

ゆうをいかゝはれんじ なすことにはもべらん。
もとよりをろかなるころのをこなりにこそと。
うしこまり罪し給はれとさよくさうどきて。敬乃
うゝ紫のとうちぜんじ なへる。れ気色を給はりて
胡中将。菓の色こくことにふさなるべきをありて。
まらうとのれ盃にくちふとりてもてなやむに。おとゞ
むしさ紀にかゞとはりけん敬の菓まいより
すぎてうれるそれども。宰相さうづきを持なるべし。
かしきばかりもいしなりなへるさ成。いとよしあり
いくへり落けき事をすぐしきて菓の
ひもとくありにあふらん



夕ノ柏
頭中将ぶまへば
柏
こをやめれ袖にまがへる萩の葉見るひと
がしや夜もまさしんづぎくにこれぞむなすり
かれど思ひのまぎれてしたぐしうしぞ
酒ノ上
これよりまさしぞ七日の夕月夜ゆづくよ
かなりて池のごこのどうにみすいけれり げに
まぶほのなりまずまどもの さしぐしきこえ
なりにいとうしきばしこそこれこそ松の
まぶきほどにいあしぬにうれり葉のさ面にの
つもちしずおもしろし 例の寄の柏ノ斉 かね こゑいと
なつしくておしかきをうしふ 以 おとぐ 詞 いとけや

けうもつうまつるれと打こぶれなて。としへる
けるこの家のとうちくまへなへ家。れと思いと
おもしろし。おしきほどまこぶりがちしきれ
あそびまて。抱もひのうしずなりぬめり。やうく
夜ふけゆく程に。いたう(夕)重なやこをして。こぶり(詞)
心ちいとこへがたうて。まうでん重もほどくしく
こそ侍りぬべけれ。夜ね前ゆづり給てんやと。中(柏)約に
うれへ給。おとゞ(詞)。朝臣(あそん)や(柏をこ)れやすこ前もとめよ。おこな
いたく思ひすくこて。むしいなれば。まうり入ぬといひ
もてくいりぬぬ。中(柏詞)約家のうげの拵(こゞ)ねよ。いうまぞや
くましきしるべまぞ侍やといへば。松(夕詞)にちぎれるが

あざなる筋は、ゆくしやとをめ給、中(柏ん)ねいころ乃
うちに、ねるのひざやとしふ所あれど、人ざ面のさふ
さ面にめでたきに、うもありてなんと、ころがけ
ひろうことなれば、うしろやすくしちびきろ、おとこ(夕ん)
だいに養うとおぼし給にも、ひ(地)ぐ身いとゞしげうし
くぞ覚しのひ給し、女(雲ね)いいとしづしとしひ
しこてもれし給も、ねびまされるは、省稽いとゞ
あるぬ所なくめやすし、世(夕祠)のる先しにもありぬべ
うりつる身をこころもてこそうまでもおぼし
ゆるさるめれ、志をしり給いぬもさ面ことなるつぎ
れとうしこ字し給、が(柏牙)ねのすくしいづしつるおし

がきのをもむきはこしとゞめ給つや。いつきぬし
れ。かもぐちのとそ。さしいへまほしかる
つれとのぬへば。女いとまてまくしとおぼして
あさき名をいひなぐしけり河ぐちもいかに
もしく関のあらがき。あさましとの給ま。いと
こめきたり。すくしうちわらひて
もりまけりくさぎの関をかぐらりのあさきま
のこはおふをざらなん。年月の川もりもいとまり
なくなやましきま。地おぼしずとしひまうちて。
くるしげまもてなして。おくりもしらぎがほなり。
ひとゞきて。まづしふを。おとゞしたりがほなか

あさいかれとさがめ給。タ されどあらしもてぐぞい
で給。ねくされのあさがほ（タノ）こゝろかひあるとし。
此文（法約ノ）はる紙志のびたりつゝさ夜のこゝろづかひまて
あるを。中（宮ヨリノ）くゝふは元男し給ちぬを。抱いひさがるさ
ごぐちつきしろふる。おとゞ（以）はりて三給ぞ。いと
けりなきや。つき（文ノ詞）せざりつゝ此かしきり。中くい
とゞ志志しるゝ身のほどを。こへぬこゝろまる
きしぬべきを
タ とゞむなる志のびる志ほりて。もと（をイ）ゝ由こゝふ
あしもるゝ袖の志げくを。など（比）いとなれがほなり。打（以）
ゑまて。手（詞）をいとゞくもうきなるれまけりれなど

の給もむかしのなぐりなし。此返しいといでさ
ぐるげなれば、こぐるしやとて、さもなげしもぐりぬ
べきことなれば、けうりなぬ。此使のろくなべてなるぬ
さ夜ばかり。中将なりしさ夜ばもてなし給。
つねはひさかくしつゝろくろへあるこさし此ハク
ひ。そふれおもてちなど人ごしくふるまふめり。
右とのぎうなる人の。むつましくなげしつゝひ給
なりけり。六条のおとゞも。かくとさうしめしてぞり。
宰ねつゐよりもひかりそひて。糸りなへれば。うち
まもりなて。げさはいかはふこなどもれしけや。
さしさ人も。女のすぢはこゞるゝこゝあるを。

人にうらうらづらひ。こゝろいられをですぐされたる
なん。すこし人にぬけたりけるにこゝろとおぼしけるに
おとゞのにをさてのあまりすくしてなどうりなく
ろげおれ給ぬるを。世人もいひいづることあらんや。
さりとてもいづ方たけうしがかに心をごりして。
すきぐしき心だんなどもしし給ふ。さしそお
いらかにおぼさなる心をさてとこゝゆれど。しるこの
心だんおくしうぎくをありて。人君しまくき所
つきぬへる人なりなど。れいのなしへきうしなふ。
ことうちあひめやすきにあきひとおぼさるれ子
ともこしぎずこしうこのうこだうりとこし給ほう

ほかりてはおるじ御をうけしたりたるかと見
ゆるを、おまんにてはさ夜ぐあれめでことこそ語
へり、おとゞいうすきれちをし、志ろきれぞのうら
めさたるが、もんけぎやかなつやくとすきたるを
なりて、れつさをずあてはる夜めしうおりします。
宰相殿はすこし気ふりきれちをしに丁子ぞめれ
こゞろまで志める、志ろきあやのなりけりしき紙
きぬへる、ことさしめきてえんにこゝろ四月分くれん仏ゐて
なりて、れ導師をそく来りされば、日くれて、清
うさぐより、つしまべいぐし、ふをちど、御御や宣
ざ夜にかたしぎ、こゝろぐにしのへ望、清まん志

さほうをうけして。志遅なども年りつどひて。なる
なるうるはしき御前(こぜん)よるとも。おやしう心げかひ
をしれてなんしがちなり。宰相(タ)は志げこころなく。
いよくけさうじひきつくろひて出給。けざとな
らひどなさけぶち給ける人はうしめしと志ふも
ありなり。年代のけもりとりそへて。志ふやうなる
御ちからひなめれば。こづともしんやし。おるじ志
はなとぐもいとぐ志きちりまさりをうけしき物を
おぼして。いらじうもてうしづき罪給。まけぬるうる
のはおしさは程おぼまど。つゝも物るまじうぞ。よめ(タノ)
やうなる御心ざ由などの。年代こと心なくて。わんじを

ぐしぬへるなどをありがたう思しゆる寸。女れ（さぐでん）ぬれ
有様などよりも。雲（雲力ノ）やうよめでたく。あらまほし
されば。小方（四宮）さぶらふ人ぐなどは。心よりしぞしひいふも
あれど。なまのくるしきことかあらん。おぞちの小方（雲力ノ母）
などもかくかくなりてうれしとしきてし給ひ
りて六条院の（明石姫ノ玉鬘へ参りたまふ）れいそぎは。女よ日のほどなりやり
さいのうへ（雲）。あれはまうでぬふとて。れいのれ（女ヲークさ之）かな
さいぎなひきてぬへど。なりくさしもひきつぐ
きて。心やましきを思して。これもくとまほ
めてことくしきほどはもあらず。れ車女だうほ
まて。れぞんなどもくぎくしき人ぞおほくを。

あらず事そぎたるしをけたひことなり。まつりの（かつ成まつりこ）
日のあるさまにまうでゐて。人さまは抱れたんぞ
べきれさじきにおもします。れうさぐの女ばう。
をのく車ひきつゞきてれまへところぐしめ
たる程いかしうれいそれとそをめよろ。おどろ
おどろしきれいさはひなり。おとゞも（係人）中（秋好）父のれ
母こやまだ前の車をしさはこれかへりしおりの
こと思しまて。時（係詞）よるころどうして。さやう
なることなんなさけなきことなけるこよなくとひ
けらうし人（蓑）もなげきおしやうしてなくなりま
さく。その程いの程なちて。ぬりとまれる人ども。中（夕）程

くさ人まで、まづくまなりのぼるめるも、こゝやはなるゝ
ひなさすぢまでおいするも、おもへはいとこそ先
なれ、すべていとさゞめなる世なれどそ、何ぞまも
せふまゝまで、いけるかざりの世をすぐさ海かし
それど、のこり給はんす急の世などのことしへなさ
おとろへなどをさへ、せひまゝかゝるれどとうち
ゝとひまて、上遊ならどもれさじきまゝ来り川どひ
一ぬへれば、そなるに出ぬ、近傍づゝさの使は、亂中ぬ
なりけり、れ大殿まて、出ゝろ取りぞ人ぐは来り
給ける、さうちいしのすけもつゝひなりけり、おぼえ
ことまて、内無実よりもじめまりて、六条院などゝ

よりもれとふしひどと所をさまで。れそろふを
いとめでさし。宰相(タ)の中ね。いでこちの所なりさん
とふしひめつり。うちとけずあられをかはし給
れ中なれば。かくやんごとなきかるまさぐまり
給ぬるを。ここなしずうちしひかり
ちまとりやかふのうぐしまかしこしぬぼめ
くまでもなりまけるれ。おさましとあるを。
ありすぐしこまもぬぢりを。いかぐ(若門侍)おもひけん
いと拙さはがしく。車まのうほどなれば
うぎしてもかしこどしまく菓の名ハかつらを
ありし人やしるしん。まうぞなしでいと罪しこり。

それかれどねかさいへとおばもあ候この
内侍のすでもしるわずそひまざれめんべきうくてれ
まいりまゐのうそひめべきゑせうるまおぼく
しくもえそひきよしひ給もしじうかはりでは
みれしらうこともやさんましとおばもうへを
つみまおもへべきことのうくへずそでもぐ給せ
みへもともみしとこひあげうらんこのれころ
まも今はやうくおぼつきく義はおばしある
らんらじ心なされまなんもおいうしとおまひ
ありあそこのおりまえんまらあんまざいとあえか
るうほどもうきうのそきまさよふ人とそまいり

けりしきのゝこそおほかれ。れめれとうちも。こゝを
よぎぬことの心いうかざりあるを。こゞかしも
えいとしもさかしいざしんほどうしろやすうる
べうときてしぬへば。いとよくおぼしよるかれと
そして。さるんとあるまはもかうしひの給かれば。
いうじくうれしとせかことかるひ侍る心ちして。
人のきうぞくなるものことも。やんごとなきれ有様に
をとりまじく。いそぎうつ。おまゑちん。なをこのれ
おひささこまゝんの心かくつけつ。いまひとうび
こまり世もやとゝいのちをさへしうねうなしてねん
じけるを。いうしてうれとせふもかるし。その様ハ

（紫）うへそひてまりまへり。れて車にもたちくぐり。うち
あゆこなど人けろうるべきを。けぐさめは母もひえぐ
うしず。たゞかくこゞさなり給ふのさずにて。けがかく
ながしかるを。かけいつこじう心ぐるしうおもふ。（地の名語）れま
いりのぎしさ。人のめおどろくぞうるものことはを
ドとおぼ（源ノ）しつゝめどゝ。をのづしよれつるのさ海
にぞあらぬや。かぎりもなくかしづきすへなりなて。
（紫）うへはまことにあはれにうけくしとおもひこそ
給ふつけても。人にゆづるまじう。（紫ノ法娘あばとノ人ニ）まことてりかゝる
こともあらましかばとおぼす。（源）おとゞも。（夕）宰相の恵も。
（紫ノ子ノあさてるとこそ）ただこのことひとつをなん。あるぬことなるとなん。

かくしけるに三日すくしてぞ。（紫）うへはおもほしてさせ給。
くちをしかりて（明石ノ）見給へ。（紫ノ明石ニ）御対面ありし。（紫詞）かくおとなび
給けんぢめをなるん。年月のほどもさしはなれ給はず。
うとくしきさまへぞては給ふまじうやとおぼしけり
のみて。（地）御心ざし給。（明石を云之）これもうちとけぬさましめ
すあり。（明石ノ）かれなどもうちつひけりひなどもじんべくそ
ちくの（紫ノ）御きこえ給。（明石）文つとけるかきりあまたれ
ていきせいとこまめてうしところぞ。（明石ふ）かしの中にも
（紫女）せられてかれ（源ノ）こゝろざしおもしびなきさ御は
かしこまり給けるも、いとこまつりとものしつゝ。
かきまそてきかなるしび中ゆる（ちぎり）契ありけりやはと

思ほれうつて姫ぎみのつとゝるゝまほしく
れて車ちかどゆかされなで。女房のおりさ給へり
こしあずるめをさらひらしずかにさすがなる男のほど
ありつゝいらけげるひめちかれやうなるれ背さ給ぬ。
常のうちしてさまかも。涙のこゝらぬまへめて。
ひらつ袖をそでさしきりけり。常ばかりけるなるげさ
ちづゝさ給ぐうさる男と姫君ひらしけるいのちも
のべたまひしうゝあれぐくちかきに川けて。ましとに
すゝよしの神もあはれなるずなしらかずなさ給
まうしづきまいてこゝろなまずめくとなくゝ。
かきくちかきゝ人のらうくしさみまれバ大かるの

海ノ よそほしよりこしめなべてなしぬれはありさ海
くちなしを家もわきれ心ちまうところとは
そひそへしあつりうごころきまつるれらくの人
あだはこの母君のくくそさふひのみをこさずよ
いひなしなずすれどふれまけるべくもあらざ。
いまめしくなるびなきをばさしまもいなず。
そろうらうしおられけちひをちなさきこしよ
つけてもおしまはしくもてなしきこしめへれど。
君ごへなどもめづらしきいど家までどうぐよ
さふよへくも心をひけろよ女房のかいは有と海
きへうじくきのへなしあつり。注 うしへときうへこき

ありふしにはまいり給ひ（紫と碧とノ）ありしひあしまほしく
うちとけりにさり（碧ノ）とてさしすぎ抽なれど、おな
づしりうべきもてなしちる、落なく、おやしう
あし面ほしき人のれありさ面こころぞへなり、（深ん）れ
とぐもなぐらぜのこおぼさるしれ世のこなる
まとおぼしつるれまいりのひあるさ面にこなる
なしぬて、ころかしなれど、世にうきこるやうにて
こぐるしかりつる（夕）宰相の君も、おもひなくめやすき
さ面にしづまり給ぬれば、れ心おちぬとてゐて、
今はほいもとげなんとおぼしなる、無いの（紫）上君れ
ありさ面のこすてがこさにも、（秋好）中ぐ女おりしませど

なるかなしぬれこころよをなり。この此(秋好)かたりを。
世にしられたる姫(紫と)やぎ後まは。まつさきてしのふべ
かれば。さりともとおぼしゆづりかり。夜の此(花ちる)かたの
時ごにまちなやぎ給まじきも。寧(タ)ねの和志のへだて。
これとりぐにうしろめたかしぎおぼしなりゆく。
あけんとしよ(添)そぢなりのべかれば。此賀のこと
をおほやけよりもじめ給りて。おほきおとゝ世志
いそぎなり。その秋(添)を上天里(てんりう)になずしふる此位え
なて。こふくもしつきつかうかりなどこれをひ給。
うらでも世の此心にうちたぬことなけれど。なほ
めづしうりつゝ。昔の例をあらためて。院(ゐし)目どもなど

ありざ海ことはいろくしうありそひこまへば酒(淨)は
まいりぬべきことうたうるべきをぞ。うつはおばし
けり。うくてもれあらずえ(冷)うどはおばして。世中を
もじうりて。位をゆづり(源は)置て給はぬことをなん。朝夕の
れなげきぐさ成けり。酒(以左注大臣は奴給之)大臣あがりなて。宰(夕)相中将。中
納言はなりぬぬ。れよろこびは世給。ひう里いとじ
まさりぬへる。さ海うたちよりもじめて。おかぬこと
なきを。おほじのおとぶもおほかく(言ぬ)人はなされ
まじ。こやづくへよりもとおばしなりけり。君(言ぬ)
多いふのめれと。六位すくをとつぶやきしこうねの
こと。自(クん)のこおりくはおばし出されば。きくのいと。

おもしろくて、うけろひとりを給ひきて

あさこどりけり紫のきくをなまてもこき雲の

夜とかけきや。詞 かしかりしおりのひとことばこそ

けすこれはとゝいとまほひやうまほ思えてこまへ里。

大輔ノあれさん

そゞしうけとおしき物にし。うけくしうこなる

大輔乳母

かゝ紫よりなくなそのきくなればあきき

夜もくなもなりきゝ。詞 いかまこころなりをこまへ里

けるまかとゝいとなれてくるしがる。れ タノ地 いきほひま

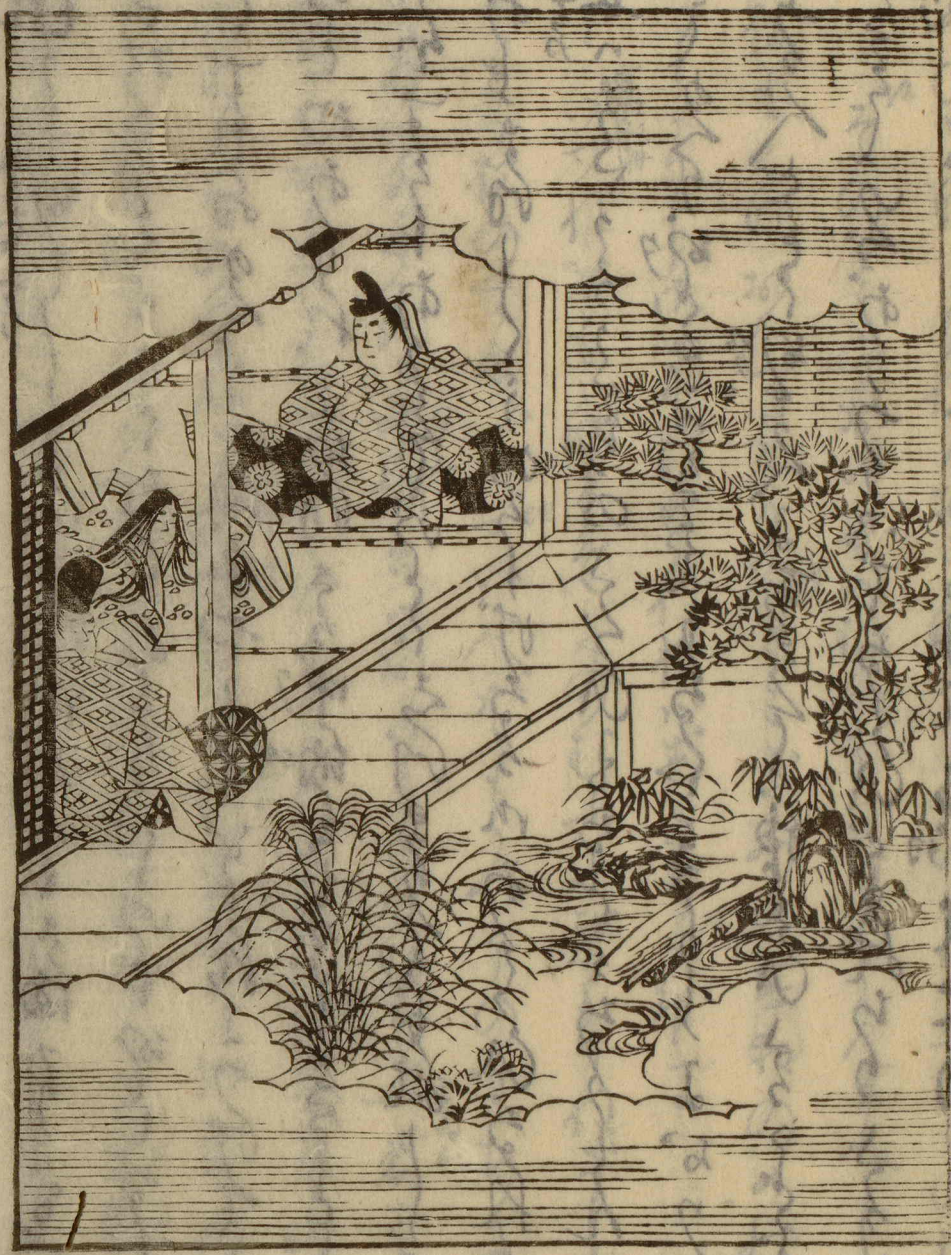
さりて。かゝれすまねもところせなれば。三条殿 大宮ノ御殿之

けたりなぬ。すこしあれまくるをいとめでこくすり

きるして。大宮 こゝやのおりしまきく方をおしこめきけ

らひて此ゝ給。むしおぼして。長ゝ也ふさ雨なん
れすまねなり。前栽（せんざい）どもなど。ちいささ木どもなり
しも。いと志げきかげとなり。ひとむし薄（すき）もうろゝ
まうきてえぐれたりけり。いくろを給。やり水のゝ
草もかさあらためて。いと心ゆきたるやしきなり。
おかしさ夕（夕雲カ）雲のほどを。ふさ所ちがめぬて。おさ
ましかりし世のれおれされ物語などし給ふ。
恋しきことも。おほく。人のもひなんこともちづしう。
女（雲カ）ぞえはおぼしいづ。ふる人どものまうでちらぶ。
ざうしぐまさふらひけるなど。まうのぼりあれ
まりて。いとうれしともひあへり。おとゝ（夕）君

なれこそは君もあるべしこし人のゆくゑハ
しるやなどれましたる。女(雲カ)
なき(雲カ)人のかげぐるしずつれなくてこころな
やれるいさしねの水。など(地)のなふほどは。おとぐ
うちよりまうで始けるを。紅葉の女はかどろ
かれて。ひとりぬへ里



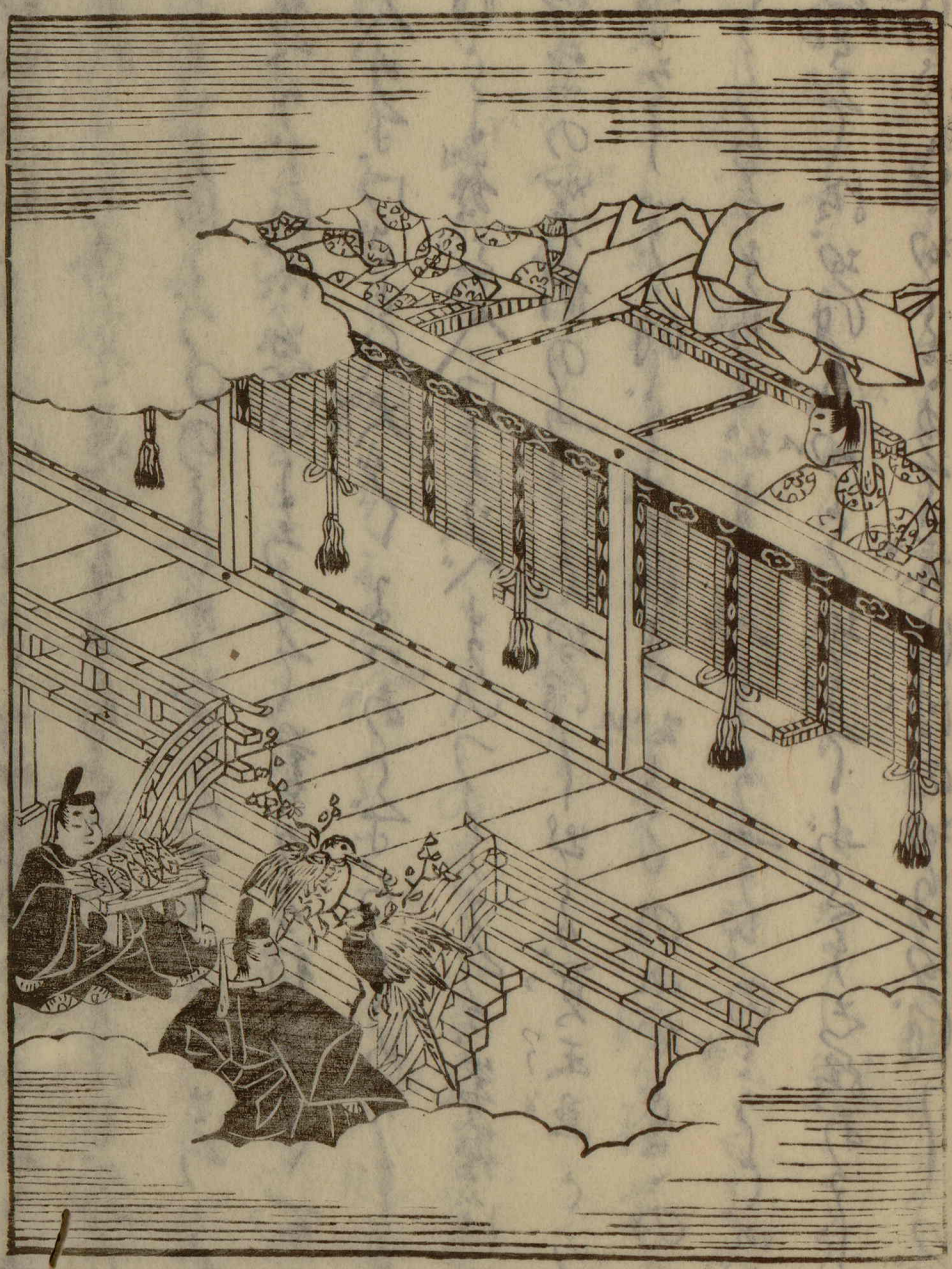
ひんしおもしまいしはあるさ海ありも。木
さわさかくることなく。あたりくいとおとなし
くすまぬのへるさ海。茶やかなるさ給につけても。
いと物あはれにおぼさる。中納言もかしこきことに。
かすてしあるべて。いとゞしげまりてもれし給。
あしまほしくうめくしげなるはあはひなれど。
女はまたかるかたちのこゝろひもなどかなるしんと
こしなへり。おとこはこれもなくこゝろしにおかす。
かるべどもとおもへに取えて。神さびたることゞも
こそしいづ。ありつゝれてなしひどもれちりたるを。
はらんじつけて。うちしほれ給。一刻 水のこころ

ぞ○まほしけれど、なこれにとゝいふしてとの給
そのゝのおいまいむべもらちぬらんうへし
こ松もこけおひまさり、おとこぞみの寧和のめれ
とつゝかりし此心もひとれねば、志たりがたま
いづれをもかげとぞこのむふる紫よりねざし
うもとる松のすゑぐ、おいぐぜもかやうのすぢま
ぞあつめたるを、中納言ハおりしとおぼして、女君も
おいなくおもてあらうて、くるしとさく給、神楽月の
廿日あまりのほどに、云条院にも御幸あり、紅葉乃
さかりにて、けうあるべきさくびのこゝろこゝろに、朱雀
院にもれをうそこありて、院さへ口たりおりします

べかれば世に免づしくありがたきことにて。
よの人もこころをおどろか守。あるじの院(源)がたも。此心
を問ひし。めもあやなる此ころまうけをきうせ給。
この時にもり誓ありて。まつむまぢの殿(との)に。左右(さう)乃
つきの此むまひきならべて。左右のを渚たちそひ
たるさほう。女用のきちにあやめまられぞかうひ
たり。ひつじくぐるほどに。これこのさん殿(でん)にうけ皇
おりします。こちの程そりたし口に殿にいましき紙
しき。あらはなるべき事にはさんしやうをひき。いけ
らしうしれさをぬへり。ひがしの池に母どもうけて。
こづしどころのうるひのおさ。院(朱雀)の鞠(う)うひをめし

ちらべて、粉をおろさをこまへりちいさきふれども
くひこり、ひざとれかくんとはなけれど、すぎ(冷ノ)させ給
こちのけうぢうりまなん、山のもみぢはいづかくを
をとしねど、ましのおもへは心ことなるを、中の
ちうのうべをくづし、中門(ちうもん)をひしきて、さうのへぐて
なくてかくんぢさせぬふ、水産(賞んざ)ふくけよそひて、お(源)
なじのれ産はくぐれるを、さんじ(冷ノ)あてなをさを
給ほどめでこくこえこれど、こ(冷ん)かどはれかぐりあり
いやくしさをけらして、こをなり給もぬこと紙
なんおぼしける、地(地)のうをて、たのか粉とり、蓋人一所乃
こうぶひの、小野まうりつうまけれる、さりひと

づひを。右のまけさげて。志ん爰のひんがしより。
おまへよいぞ。こちしのひざりこざり。ひざを
つきてそうせ



おほきおとゞ（以）おほきゝとなて（冷）ぞうしゞて此
もれは無る。ここ遅ぐ遅ゝるどの此まうけも。めづら
しきさ海に。つ〇のことぞをかんて。つゝうまつらを
ゆへり。これ此恐いまゝりて。善かゝる行に。がく所（そ）の
人めす。ひざとれ大（おほ）がくにはあらず。ちまめしき
ほどに。夏ぐ人ひゝへまひつゝうまつる。朱雀院の
紅葉の賀。例のゝことおぼし出る。賀王恩（うつうそん）といふ
をそうするほどに。おほきおとゞ（以）の此おとこの十
ぢゝりなる。きちにおもしろうまふ。うちのこうど（冷）此ぞ
ぬぎて給。おほきおとゞ（以）おりてぶたうし給。あるじの
院（源）。さくとおしきなて青海波（せいがいは）のおりおぼしいぐ

夕まさらまがきの菊もありくに袖折かくし
秋をこふしし。おとゞそのありいおなじ舞にたち
ならび笑し給しを。これも人にはすぐれたまへ家
身なれば。なをこのきたくこよなりける極覚し
たしか。時雨なりたりがかなり

紫の雲にまがへるこさくの菊にごうなきよれ
ほしかとぞこゝろ。時こそ名をれとこさて給夕風吹き
くもみぢの夕こゝろさうすさ。かしこさをしこさ
ける夜のうへこしまがふ。庭の面にかたちおしきに
らこんべのやむごとなき家のそだなどにそおなさ
おかさしつゝぢこゝ。をもうえび深などつゝのごと。

例のけしうりひさいだうり亂色（りしき）をこきて、こじりさ
抽どもをほのゝ舞けし。江葉のうげうりかへる
いるほど。日のくるくもいとおしげなり。がく所（そ）など。
なごろくさくいをず。冷うへのれあそびたじまりて。
ふむのつさのれことごもめす。抽のけうをちなる
ほどは。れ前はこれれことだまいわり。うぎの法し
のうちぬこゑも。朱雀院いいとめづらしく哀は
きてしめす

朱雀
私なんて時々ふりぬる里人もうるもみぢの
おとそこゑ。地うしめしがるぞおぼしたるや。こゝど
冷
よれつきの紅葉とやこういうしへのこゝあしは

ひけり庵のうしきをと（辻）ぐ門しきりを給（冷ノ）れうちち
いかくねびたるのゆりなてぶぶひとりあれとこ
えさを給を中納（タ）言のこふしひ給がことくなりぬ
こそめざ面しうれおてよめでこさけたひや
ものひあるしまをとりまきしん おざ（タノ）やうりまか
りしきとしたいそひてさへこも ふ（タノ）えつうりまつり
給いとおもしろし さうがれ毎ごべこたしり
さふしふ中ま弁（抽ノ牙）のか侍のこゑをぐれたり れさる
べきよこそとそしうれ れるしひあり

69038
6 Ap 78